# 残像の脈々
## ～vol.4～

少しでも皆さんが「残像の血脈」を
様々な角度から楽しんでいただけたらと願い、
この連載を開始させていただきましたが、
とうとう今回でこの「残像の脈々」も最終回となります。
短い間でしたが、こんなど素人が書いた作文に
お付き合いいただき本当にありがとうございました。
SNS上ではありますが、皆さんと繋がることができたこと、
とても感謝しております。
前回、前々回と一本の軸に沿ったテーマで進めさせておりましたが
今回はそれが全くなく、着地点もどこかわからないまま
今は闇雲に執筆しているところでございます。

今日は10月5日です。
昨日は「UROBOROS編」の舞台挨拶でした。
メンバーと一緒に舞台に立てたことを誇りに思っておりますし、
メンバーを見つめる虜に皆さんの表情が
とても素敵で愛おしく感じました。
舞台に立つとこんな感じなんだなーと、
メンバーと同じであろう気持ちを噛み締めながら立っておりました。

あの距離感ということもありますが、
本当に皆さんお一人お一人のお顔が見えるのです。
ですのでメンバーも皆さんの表情をしっかりと見ながら
お話しされているのだなと感じました。
またいつの日か、
今回のようなDIR EN GREYが少しでも「近く」感じられるような
企画をご提示できたらいいですね。
さてさて、「Withering to death.編」も終わり
遂に「UROBOROS編」が公開となりました。
これを読まれているということは2作品を鑑賞済みということで
お話しを進めていきますね。

舞台挨拶時のケータリング。
団子はありますが、残念ながら
みたらしではない。

ベルリンの会場にあったケータリング。
おしゃれです。

# 二部作にした理由

舞台挨拶でもお伝えしたのですが、
当初はウィザーとウロボロスどちらかを映画にするか、
もしくは二日間を
二時間程度にまとめて一本の映画として公開するものでした。
どういったスタイルで制作していくか、
スタッフとの一番最初の打ち合わせの時の中で
僕が下した決断は
二部作にすることでした。
とにかくライブを一曲もカットせずに見せたかった。
それに彼らの中にはセットリストに沿った
テンションの「起伏」というものがあるはずです。
そのステージ上での感情の流れを、
映画を通して皆さんに感じてもらいたかったし、
それがあるからこそライブを見た感覚、
すなわち映画を体感することができるのではないでしょうか。
もう一人の主人公はこの楽曲たちなのでカットはできないですよね。
中には重複した楽曲もありますが、
二作品それぞれ独立した作品という見方もあるので、
敢えてカットはしませんでした。
それが二部作にした理由でございます。

# オープニングとエンドロール

まずオープニングですが、

制作段階から、いきなりライブ映像から始めようと決めていました。

これはライブ映画ですよ！

と一発目から決定的なものにしたかったのです。

同時に一曲目をアヴァンのような位置付けにすることによって、

ある種の映画的な流れを作りたかったのです。

アヴァンというのは、

わかりやすくTVドラマで例えると、

その物語が始まるきっかけが主題歌とタイトルの前に流れますよね？

それをアヴァンもしくはアヴァンタイトルと言います。

僕の大好きな映画はみんなこのアヴァンがありますし

タイトルが出るタイミングもかっこいいのです。

その後、その一曲目のアヴァンが終わり、

SEと共にオープニングクレジットが始まります。

ハリウッドではオープニングだけ演出をする監督が存在するほど、

オープニングクレジットは作品の「掴み」になるので超重要。

「残響の血脈」のオープニングクレジットは二作品共に

「血脈」をテーマにして、

それぞれ違ったアプローチで制作しました。

「Withering to death.編」は

ズバリストレートに「血管」です。

CGの血管を、彼らが旅をした街とオーバーラップさせて

その街の血管でもある高速道路とシンクロするような演出で

展開させました。

「UROBOROS編」は地球の血液でもある
マグマが地表に流れていく様を
血管のメタファーとして見せていきました。
エンドロールに関しては、使用楽曲についてSNS上でも
賛否両論なのは周知のとおりでございますが、
これにも理由があります。
SNSでもお伝えしましたが、
正直どんな楽曲をエンドロールで使用すれば良いのか悩みました。
最新の楽曲も案としてありましたが、
自分の中にはっきりした理由が見つからないまま、
なんとなく最新シングル「Devil In Me」のジャケットを
ボーッと眺めていました。
その時でした。
そのシングルに収録された楽曲のタイトルが
目に飛び込んできたのです。
それは、「予感」と「cage」でした。
「これだ！」
直感で決めました。
それは再構築された過去の2つの楽曲と
「残響」という言葉の持つ意味が繋がった瞬間でした。
それにこの楽曲たちはキャッチーなメロディとアレンジ。
この「予感」「cage」が流れることで、
常に緊張感が漂っている本編との「コントラスト」や「安堵感」、
「映画が終わってしまう寂しさ」を
皆さんに感じてもらいたかったのです。(伝わっているかなー)

これでこの作品の全てのシーケンスについての解説や裏話を
皆さんにお伝えしました。
個人的にも、この「残像の脈々」に掲載されているエピソードは
なかなか貴重だと自負しております。
裏側やバックボーンなんかを知っていただいたうえで映画を鑑賞すると
作品に対してより深くより濃い感動を
味わうことができるのではないでしょうか。

## 最後に

「UROBOROS編」でもメンバーの死生観に触れているように、
僕らの命には限りがあります。
この年齢になると新しい出会いですらも切なく思う時だってあります。
それくらい「死」というものを身近に感じる、
そんな年齢になったんだなとつくづく感じます。
僕もいつまで
この5人の映像を作ることができるのかはわかりませんが、
いつかお別れが来るその瞬間まで
彼らとクリエイションができていたら幸せです。
僕も皆さんと共にDIR EN GREYを愛し続けたいと思っております。
一ヶ月に渡って皆さんにお届けしておりました「残像の脈々」ですが、
これにて終了となります。
短い間でしたがお付き合いいただき、本当にありがとうございました！

「残響の血脈」監督 濱﨑幸一郎